

も全き相關關係にあるとはいえないであらう。兩者の間におこってくる矛盾とその克服の過程が具體的に緻密に解明されることが望まれるのであって、安直な關連づけは説得力に缺けるといわねばならない。また全巻を通じて詔敕起草者の地位の「清要」「清切」性が繰り返し強調され、天子權力の強さ弱さが問題となっているが、それを立證するのに史籍にみえる修辭的な章句を例示して、それだけを根據にされる場合がしばしばみられる。それもやはり説明不足であり、平板的な感じをうける。著者は詔敕の起草者がだれであったかを見出すことに主眼を置かれていたので、詔敕の様式や種類などに關する論及が少なく、具體性に缺けることは先にも觸れた。そうした關連する諸問題についての綿密な考察は今後に要請されよう。

本書はかならずしも讀みやすい論稿ではない。一つには、文章が生硬で用語に一般に熟さない漢語が多く用いられていることによる。なかでも制度上の特殊な語彙がほとんど解説もなくそのまま使用され、時にそれが「周知のごとく」として片付けられている。一般に制度語彙は難解なのであるから、面倒でも一應の注解が必要であった。さらに記述の隨處に「ともあれ」とか「それはともかく」などの接續詞を用いて論旨の轉換が行なわれ、一句中に二度出てくる場合すらある。あるいは「所以なしとしない」「少なしとしない」などの曖昧な言葉が使用されて論旨を不明瞭にしている。文章の個性とはいえ、論述の嚴密さが望まれる。さらに引用漢文に誤字脱字があることを指摘したが、その他の箇所にもみられ、全體を通じて誤植が目立つことも惜しいことである。

いま大學では、はげしい紛争のなかで、まさに制度が問題とされ、舊い體制の變革が求められている。改革の道を模索し試行していく

困難なしかし貴重な體驗から、新しい制度史も生み出されてくることを期待したい。
(竺沙 雅章)

Li Ta-Chao And The Origins of Chinese Marxism

Maurice Meisner

Harvard East Asian Series 27

Harvard Univ. Press 1967 266pp.

近年、中國共產黨史の研究が盛んになるにともなうて、その創設者の一人である李大釗の思想が注目されつつある。中國では勿論のことだが、わが國でも一九五七年に、はじめて本格的に、李大釗の初期の思想が論じられて以來、幾つかの研究成果が出されており、殊に『李大釗選集』(一九六二)が出版されるに及んで、一層活潑になった。とはいうものの、今日までの李大釗研究の主要な關心は、マルクス主義受容のあり方と五四時期の活動など、だいたい初期の思想に集中していると思われる。最近の重要な成果と言える森正夫『李大釗』(一九六七)も、右に指摘した傾向を免れていない。

ここに紹介する Meisner の李大釗研究は、後で觸れるような様々の疑問點や缺陷をもちながらも、ともかく彼の全生涯と思想的展開を跡づけた試みとして、今後の研究を進める上で見落すことのない收獲だと思われる。

この書物は、著者がシカゴ大學歴史學科に提出した博士論文をも

とにして、ハーバード大學東アジア研究所で、John K. Fairbank や Benjamin I. Schwartz の指導を受けて完成された。その他の助言者として列擧されている中に、毛澤東研究で近年注目されている Stuart Schram の名も見える。著者の研究經歷については詳らかにしなかつたが、後注②中に、「The Despotism of Concepts: Wittfogel and Marx on China」(The Chinese Quarterly, No. 16, 1963) が引用されているのが、ただ一つの手がかりである。現在ヴァージニア大學で中國史の講義を擔當しているという。

内容紹介に先立って、便宜上、目次を掲げておく。

序論

第一部 中國マルクス主義の起源 第一章 青年時代 第二章

革命の序曲 第三章 ロシア革命とマルクス主義の紹介 第四章

章 人民主義者の傾向 第五章 マルクス主義と五四運動

第二部 マルクス主義の再解釋 第六章 決定論と能動主義 第

七章 歴史についての哲學 第八章 民族主義と國際主義

第三部 政治問題 第九章 レーニン主義と人民主義 第十章

國民革命 十一章 農民革命

結語

序論。著者はまず二つの假説をたてる。①中國マルクス主義は、中國の現實の反映であると共に、逆に中國の現實を形成したものである。②中國共產黨の政策は、その指導者たちによるマルクス主義思想についての理解のしかたを示す産物である。このような假説に對して豫想される、政治史的立場からの幾つかの反論にもかかわら

ず、思想史學的方法の有効性を著者は強調する。そして、マルクス主義理論と中國の客觀的状況との相互關係の検討によつて、次の三つの結論が導き出るといふ。①マルクス主義理論の變化は、中國の客觀的な現實の反映ではなくて、中國共產主義者によつて把握された現實についてのイメージの反映である。②中國共產主義は、マルクス主義理論の眞の意圖を隱蔽し正當化するための試みである。③中國共產主義は、現存の歴史的状況を變革するためのユートピア的精神の一形態である。

最後に著者は、右にのべた如き中國の歴史的條件とマルクス主義の繼承團體と相互作用という立場と共に、個々のマルクス主義者獨自の知的情緒的傾向という點での研究が必要だと説く。

第一章。この章では、日本へ留學し、一九一六年歸國するまでの期間の思想形成があつかわれる。ここでは、李の經歷の詳細な記述は避けて、著者が提示した新資料、或は著者獨自の李大釗の理解を拾つてゆく。

著者はまず、李が早く両親を失つて祖父母に養育された點に注目して、人格形成の上に及ぼした影響——後年、古い世代や傳統に對して同情的であつたり、誰に對してもよき友達だつたのは、祖父母との情愛のこもつたつながりによるといふ——を指摘し、またその結婚生活については、祖父に強制されたものであつたけれども、他の新知識人と違つて、離婚したり、妻を見棄てたりせず、一生彼女を愛したことに注意している。

北洋法政專門學校の時期については、雑誌『言治』に發表された幾つかの政論が分析される。この時期の一般政治傾向は、「儒教の倫理的教訓と西歐の自由主義的立憲論とのやや曖昧な混合」だと

批評されている。そして「大哀篇」（一九一三）にあらわれている政治思想は、多くの點で傳統的儒教の見解に結びついているが、李は傳統的秩序の復興には關心がなくて、むしろ正統な儒教の見解から、極めて非傳統的で、殆ど民主主義者 Populist 的觀念——人民を國家から守る手段としての人民主權という——を導いた、と説明される。

李は宋教仁暗殺事件（一九一三年三月）で、よき支配の効果に對する信頼、現體制に對する希望を最終的にうちくだかれ、政黨政治家に反感を抱くが、けれども當時流行したアナキズムやテロリズムには赴かず、むしろこれとは對決し、「是非篇」（一九一三）では、「自由と秩序の問題に對してほとんど儒教的なまでに保守的な接近のしかたをしている」と著者は見る。

一九一三年の中頃までに、李が進歩黨と結びついたことについて、著者は、自由主義的代議制という思想的類似性と、湯化龍との世俗的な結びつき（經濟的パトロンという）を挙げる。しかし進歩黨への参加は、全く絶望的な政治状況の中で、不承不承に選んだものだったと説明されている。この李の絶望感について、著者は、*My Autobiography*③を引用して、「渾土宗の中に後退することとも考えられていたようだ」といつているのは興味深い（ただし引用文からは、著者のようには読みとれない）。

李は一九一三年十月、湯化龍の援助で日本に留學する。一九一四年に創設された中華革命黨と密着して活動し、その黨員の支持のもとに神州學會をつくって學生を動員し、袁世凱の獨裁化に反對した。グッドナウに反論して人民の權利を擁護した論文「國情」（一九一四）について著者は、「古い秩序の鞏固さに對する奇妙なノス

タルジアがある。社會の自然狀態を國家が侵害することに對する殆どルソー主義者の嫌惡がある」と評している。

李が二十一箇條要求に反對する運動に没頭して、「警告全國父老書」「國民之薪膽」（共に一九一五）を書いた時、民族主義的情緒は最高潮に達したとのべる。

この留學時代に、陳獨秀の「愛國心與自覺心」を反駁した論文「厭世心與自覺心」（一九一五）がある。著者は、特にこの論争に注目して、ともに後の共產黨創設者となる二人の思想的傾向の重要な相違が、すでにこの時にあらわれていたという。

今日の中國が必要とするのは、人々の愛國心ではなくて自覺心であり、情緒的思考ではなくて知性であり、個別的問題についての知識だ、という陳獨秀の主張、著者はここに、陳が後年、マルクス主義を普遍的權威と決定論の方法で理解した、その端緒を見出す。これに對して李大釗は、愛國心と自覺心とを對立させず、愛國心は自覺心の發展にとって基本的な要素だとする。そして人間の自覺的意志による現實變革のなかで果している人間活動の役割が重視される。二、三カ月前、中國の苦境の罪を外國の侵略に歸した李が、今や、その責任は我々自身にあると主張しだした、と著者はいう。

「人間は個人的にも全體としても、自分の境遇に責任があり、自覺的活動を通じてその境遇を變えることができる」という主張であるとも説く。そして著者は、こういう主張の中に、傳統的世界觀からの訣別、自然のままの排外感情からの脱皮がみられることを指摘し、更に、新しい要素としての、能動主義 activist 的意味を含んだ個人的自覺の役割の強調が、ベルグソンの思想にもついているのに注目する。

しかしながら、この時期は、袁世凱の帝制復活運動が極點に達していた。絶望的な政治状況の中で、右のような樂觀主義的な觀念が、どこからもたらされたのか。著者は、最初の影響は自由意志についてのベルグソンの思想であり、これを補強するのにエマーソンの樂觀的な超越論 transcendentalism が働いていると言う。そこで、このような思想的産物である「青春」（一九一六）がとりあげられる。この論文の主題を、著者は、「再生の辨證法」と呼んでいる。それは、宇宙進化についての辨證法的觀點から導かれた、二元性の觀念と歴史の中では全き消滅がありえないという信念であると説明される。この辨證法的な進化と再生の哲學——超越論的哲學は、李の政治活動にとつての樂觀主義的な根據を與え、同時に、西歐思想に深く影響されつつあった李に、再び傳統的價値の發見に立ち返らせた。すなわち、今出現しつつある「青春中華」は、有機的に古き中國に關係しているという考えが暗示されている、と著者はいう。そして、この「青春中華」の再生という觀念は、五四運動期の若い知識人や政治指導者を刺戟しただけでなく、深く根ざした情緒的信念となつて、後の中國共產主義イデオロギーの形式と内容をきめた、とも指摘される。

第二章。一九一六年四月、討袁運動に参加するために歸國して進歩黨と關係をもち、ついで章士釗と關係するが、いずれも軋轢を生じて、李の立憲主義が次第にラディカルな傾向に赴き、遂に政治活動から暫時訣別せざるをえなくなる。そうした思想過程が叙述される。

歸國後間もなく書かれた長論文「民彝與政治」（一九一六）で、李は、中國の過去の中に人民主權と自由との土長を求めつつ立憲制

の主張を展開するが、ここにはラディカルな民主主義的人民主義的潮流が流れており、そのような信念と進歩黨の權力迎合的態度との矛盾のために、李は進歩黨と絶縁したのだ、と著者は見る。翌年一月、李は章士釗に招かれて『甲寅日刊』を編集するが、そのラディカルな傾向は一層強まり、儒教は專制政治のための道具になったとする最初の傳統思想への攻撃（『孔子與憲法』）が始まり、更に、二年前にはルソーから人民支配の觀念を導いたのが、同じルソーから、中國の状況では議會主義によつては人民の意志は實現しえないとして、今度は、革命の理論的正當性を導き出した（『暴力與政治』）。こういう思想的立場にもかかわらず、孫文にもアナーキズムにも接近せず、『新青年』グループに参加したのはなぜか。著者は、當時の李の孤立感・疎隔感——それは『新青年』グループにも共通する——からきていると説明する。しかし陳獨秀らと李との間には明確な相違があったとして、愛國主義・ナショナリズムへの態度、儒教的傳統への態度、政治問題に對する態度、社會ダーウィニズム・マルサス主義に對する態度（陳は熱狂的に支持するが、李は批判的。『戰爭與人口問題』）について兩者を比較し、更に李は、現代文明は協力の文明だとして青年と老人の協力、階級互助、進歩と保守の相互依存を説く（『青年與老人』、『新的、舊的』）など、陳らよりずっと穩健で保守的でさえあった、と著者は結論する。

しかし、このような李大釗が、十月革命の聲にまっさきに應えることができたのはなぜか。それは急進的か保守的かという範疇では律しきれぬ問題だ、と著者は斷定する。そこで、二つの對立する文化の綜合と、その過程で中國文化が生き生きとした役割を果すことを強調した「東西文明根本之異點」（一九一八）をとりあげ、中國

の未來に對するメシアニックなまでの信念は、暫く遠のいていた政治的實踐の傾向を鼓舞するものだと、ここに、後にマルクス主義の受容を容易にした理由の一つをとらえている。

第三章。この章で著者は、李が十月革命に刺戟されて直ちにマルクス主義を受入れることができた理由を、彼の「再生の辨證法」から説明しようとする。

李は日本で、マルクス經濟學を熱心に學んだけれども、一九一八年末までは、その影響を發見できない。二月革命の消息が傳えられた時、知識人の反應は一般に、大戰の成り行きに與える意味に關心が向いていたが、李は、ロシア革命が中國の政治的變革に刺戟を與えることを望んだ（『俄國大革命之影響』一九一七）。このような態度を、著者は、歴史は諸國家の勃興衰退の終りなきサイクルの過程だという辨證法哲學に基づくものと説明する。

十月革命の時、國民黨がいち早く歡迎したのに反して、『新青年』グループは長い間、全く反應を示さなかった。李がはじめて、それについての見解をのべたのは、翌年七月の論文「法俄革命之比較觀」である。著者は、後進國ロシアがその後進性のゆえに、發展の餘力をもつとのべている點に注目して、「後進性は絕對的に有利な條件だ、中國やロシアの如き後進國の後進性そのものが、青春と進歩の種子をもっている」という辨證法的な再生の哲學のゆえに、ロシア革命は李にとってより直接的に、より強く訴えかけたし、彼もまた好意的にそれを眺めたのだ、と説明する。そして李のこのような考えは、トロツキーの永久革命論に類似し、また毛澤東主義 Maosism の先驅だともいう。しかしこの時期にはまだ、李は、マルクス主義の基礎的な唯物論すらも受入れていなかった。そこで、

李が十月革命をマルクス主義の普遍的有効性を示すものとして認めるようになった最初の論文として、『Bolshevism の勝利』（一九一八）がとりあげられる。この論文で李は、もはや東西文化の融合という考え（『法俄革命之比較觀』にも示されている）を放棄し、ボルシエヴィズムの擁護者になった。しかし、李はマルクス・レーニン・トロツキーの教義に共鳴してその擁護者になったのではなくて、「革命の行動そのもの、理想境 millennium が現に實現されつつあるという期待に鼓舞されたからだ」と説明される。しかも李のボルシエヴィズム革命讚美の態度には、中國はまさに再生せんとしているという信念と、エマーソンの時間觀念から導かれた「現在の瞬間」を讚美する感情とが強く作用している、と著者は解釋している。

第四章。ボルシエヴィズムへの熱情的な擁護にもかかわらず、李は、自國の革命については一言も語りえなかったが、やがて、中國の狀況の中から實踐する道として、ロシア人民主義者に似たスローガン「農村へ行け」を掲げて、農民が中國再生の基礎であることを指摘した。著者は「青年與農村」（一九一九）を、「中國における共產主義的發展にとつて最も重要な文獻の一つと思われる」といって高く評價して、この論文とロシア人民主義者（ナロードニキ）との比較を試みる。所でナロードニキが李に與えた影響については、ボルシエヴィキ革命の衝撃を受けつつロシア革命運動の歴史を學びはじめた時、二次的資料からそうした知識を得たものと思われる、と著者は推測している。著者による比較の結果を要約する。まず共通點。①資本主義の發展を社會主義達成の前提にすべきではないという考え。②民族主義的な含意をこめて純粹な農村生活をほ

め、逆に腐敗した都市を外國資本主義の產物と見なしたこと。③農民解放における知識人の役割りについての李の見解は、ロシア人民主義者の革命的自發論 voluntarism に似ている。④農民は共通の利害のためには階級の違いをのりこえる單一の結合した存在だという農民觀。次に相違點。①人民主義者は傳統的な農村共同體（ミール）を、社會主義への特殊ロシア的な道だとみなしたが、私的所有の十分に發達した中國農村の條件では、農民は社會主義的理想に向けて教育されねばならぬと考えられた。②西歐的な産業化について、李は人民主義者ほどには嫌惡していない。③李は「農村へ行け」と呼びかけたが、直ちに革命がおこることを期待していない。むしろ中國の革命運動は農村という舞臺しかないことを認めた。

第五節 この章ではまず、李が本格的にマルクス主義研究に従事した最初の所産である「我的馬克思主義觀」（一九一九）を取りあげて、そのマルクス主義理解の特徴が解明される。要約すると、①李は、マルクス主義の中、政治的實踐と人間の自覺的役割の重要性を強調する要素を、すなわち階級闘争の理論を受入れた。②史的唯物論のもつ決定論的要素をも承認したが、あまり好意的でなかった。③歴史における倫理的精神的要因の役割をマルクス主義者が強調しないのに不満で、人間精神の變革は、經濟組織の變化を伴うはずだと主張した。④マルクス主義も産業革命期という特殊な歴史的環境の產物とみなした。⑤レーニン主義の影響がみられぬこと。

次に五四運動の經過と思想狀況が叙述されているが、これは省略する。ついで「問題と主義」論争。著者は、この論争の背後に、マックス・ウェーバーの定義した究極目的倫理（心情倫理） ethic of ultimate end と責任倫理 ethic of responsibility との間の選擇の問題が潜んでいる、と理解している。すなわち、この論争で、李は責任倫理的であつて、中國の社會と歴史に對する自己の個人的責任を深く自覺していたが、胡適は心情倫理を求めることを好み、政治に關與することを避けようとした。しかし、それも結局、中國の狀況の中では許されず、二つの倫理的態度のいずれをも保てなかった、と説明される。

陳獨秀は、この論争の當時、デューイの漸進的プログラムを支持していた（「實行民治的基礎」一九一九）が、間もなくデューイを離れて、明確にマルクス主義に改宗した（「勞働者底覺悟」一九二〇）。しかし、その理解のしかたは、著者によれば、「陳は初期に民主主義と科學とを受容したのと同じ精神で、マルクス主義をそっくり受け入れた。マルクス主義は彼にとって、現代西歐思想の最も進歩した表現として、民主主義にとつてかわつた」と評される。

この章の最後は、初期の共產主義團體についての詳細で煩雜な記述にあてられているが、資料的には、ほとんど目新しいものはない。

第六章。著者は、李大釗が一九二一年末までに、階級闘争理論、歴史における人間の觀念と意識の役割の問題、中國で社會主義を實現するための經濟的條件の問題についての基本的見解に到達していた、そしてその理解は後年の政治活動に反映された、と説く。そして、右の問題について、それぞれ小見出しを掲げて詳述している。

階級闘争論。李の階級闘争論の特色は、社會經濟的な關連から引き離されて、意識の要素に集中されがちであり、また民族主義的な含著をもつ。更にこの問題について、李は、「新紀元」（一九一九）

で、相互扶助論を武器にして人類の歴史についての社會ダーウィニズムの説明を反駁し、「階級競争與互助」(一九一九)では、相互扶助は階級闘争と補い合うものだとして、階級闘争論を鈍らせている。李は階級闘争を個々の國の中で行なわれる過程としてでなく、最終的な世界的規模での過程とみなす傾向がある、と著者は解釋する。その例として、「由經濟上解釋中國近代思想變動的原因」(一九二〇)に出てくる一節「(中國は)國民全體が次第に世界プロレタリアートの一部に變えられた」が引用される。國內の經濟的社會的後進性にもかかわらず、「今日の世界經濟の中では、中國は實際上、世界プロレタリアートの位置に立っている」のであるから、中國で有力になっている新思想(社會主義)は、プロレタリア的民族としての中國の狀態に呼應したものである。更にまた、プロレタリア的民族としての中國は、革命的階級として世界プロレタリア革命に参加する資格がある。以上は、著者によつてパラフレーズされた李の見解である。このような階級闘争のとらえかたの中には、民族主義と革命的な自發論が反映されており、階級闘争論を決定論的束縛から解放し、それが極端に柔軟に中國の狀況に適用されるのを許した、と著者は高く評價している。

歴史における自覺の役割。「物質變動與道德變動」(一九一九)

「唯物史觀在現代史學上の價值」(一九二〇)の二論文をとりあげて、李が、人間の觀念や倫理の原則は、單に物質的存在の變化の反映にすぎないという唯物論的公式を支持しながら、同時に倫理は本來的な人間性であり、獨立した社會的勢力であることも主張している、兩者の矛盾を調和させようとしていないのは、彼が唯物史觀を自分の實踐的必要の満足のために、或は中國のさしこまつた狀況に

對する關心のために解釋したからだ、と著者は説明する。著者は、ここでも、マルクス主義者になる前からもっていた能動主義的衝動 *activistic impulses* の強い影響を認めている。

工業化と社會主義についての討論。一九二〇年後半に、張東蓀・ラッセル・デューイと社會主義者との間にたたかわされた、いわゆる「社會主義論戰」に間接的に觸れた李の發言(費覺天への手紙、一九二一)を引き、中國はプロレタリア的民族だという理論と同じ基礎に立つて、社會主義的工業化の道を主張したものだ、と指摘されている。

第七章。ここでは、一九二〇年から死ぬまでの七年間、李の主要な關心は唯物史觀の研究だったとみて、まず、「史觀」(一九二〇)「史學要論」(一九二三)にあらわれている歴史研究の態度がとりあげられる。それを著者は、決定論的な唯物史觀の公式がくりかえされているにもかかわらず、「自分の政治的實踐の必要性、マルクス主義の自發論的な解釋のための支えを見つけるため」のものであったという特色は、彼が、過去の歴史についての正しい觀點、現在の生活にのつての意味ということのほかに關心を寄せなかった點にあらわれている、という。次に、「不可避性の問題」という小見出しを掲げて、ここでは、「馬克思的歷史哲學」(一九二〇)「聖西門的歷史觀」(一九二三)等を取りあげる。李はこれらの著作を通して、社會主義の必然性についての信念を強化したが、同時に、唯物史觀から運命論的結論が導き出されるのを恐れたので、彼はそれが自覺と人間活動を鼓舞するものだとして強調した。「時間の觀念」の項では、現在を最も貴いもの、人間の創造的活動にのつて無限の機會を提供するものとみなす李の時間觀念は、彼の歷史觀の特色の

一つであると指摘され、さらにこのような超越論的時間論は、マルクス主義者になって後も、その著作に強く影響しているとして、「今與古」「時」(ともに一九二三)がとりあげられる。著者は、李が現在という瞬間に働いている歴史的客観的な力をみないで、現在における革命への衝動^{イムプルス}だけを見ようとするのは、マルクス主義からの重大な逸脱であると批評し、彼の時間論を「永久的實踐の哲學」と呼んでいる。「中國の歴史」の項では、李の政治論文や歴史理論についての著作を通して、彼の中國史に関する見解を求め、そこに二つの特徴を見出し出している。①歴史發展についての普遍的な型を中國史に適用することを拒否した。すなわち單線型 *unilinear pattern* ではなくて、「東と西の方向を異にした歴史的パターン」「あらゆる民族的特殊性をその視野の中に包んだ」一般的理論を提案した。②近代中國史についての極めて民族主義的な解釋。例えば、太平天國、義和團について、反滿運動としてではなくて、帝國主義に反對する人民の闘争の序幕だとした。

第八章。この章の議論は、マルクス主義は本來國際主義的であつて、民族主義は消滅すべきものであり、保守主義と結びつくものだという前提で始められている。従つて、著者によつて對立させられている民族主義と國際主義が、李の生涯を通じて、交互に濃度を増したり、或は両者が複雑な一體關係をなしていることは、解しがたい謎だとされる。「民族主義的理由のために國際主義的イデオロギーを採用し、それを民族主義的目的に用いるという中國知識人の逆説は、中國の環境におけるマルクス主義と民族主義の間の關係の一面面にすぎぬ」という。著者によれば、李は最初、大部分の知識人と同様、熱心な民族主義者として出發したが、十月革命への支持を

表明した時、國際主義を受入れて、以前の民族主義との調和に迫られた。しかし、帝國主義の侵略に對抗するアジア連邦を提唱した時、彼の「新アジア主義」は國際主義の表明であつた。また、「中國はプロレタリアートの民族」という觀念では、民族主義の意味は不明瞭である。民族的闘争と階級的闘争とは同義語であつて、中國が國際的なプロレタリア闘争で特殊な役割を果すことを意味している。李の民族主義的感情は、一九二二年以後の著作に強く反映している。「史學要論」では、中國の傳統に對する民族主義的評價が求められた。更に、階級闘争を白人と非白人との人種間の對立として論じた「人種問題」(一九二四)は、彼の民族主義的傾向の絶頂を示すものとされる。彼のこの結論は「中國はプロレタリア的民族」という理論の論理的延長だと著者はいう。所でこのような理論は本來、外部の敵の前では國內の階級對立の存在は否定され、解消されるはずのものであつた(戴季陶の理論は、その好例)。しかし李は、そのようなウルトラ民族主義の一步手前で退いて、マルクス主義者としての立場を保つた、と著者はいう。

第九章。李の革命論とレーニン主義との比較が試みられる。著者は、レーニン主義の諸特徴——自發性と自覺、黨組織、プロレタリアとマルクス主義的知識人——を検討した後、それを李の革命論と對比する。類似點。①革命的知識人の先驅的役割を強調したこと。②革命過程における自覺の役割の重要性を説いたこと。しかしながら、レーニンにとって、眞の方向性ある力としての自覺は、革命的知識人の屬性であるとされるものの、それは、革命運動の客體たるプロレタリアの屬性としての自發性と共に、集中化された黨の中で組織化されるべきであつた。これに對し、李は黨組織 *party organ-*

ization の役割を全く評價しないし、「自覚は一般人民の固有の屬性であつて、知識人だけのものではない。そして知識人の介入は、この普遍的な自覚を解放するためにのみ必要である」。このような相違を、著者は、二人に影響を与えた人民主義という問題に關連づける。レーニンの場合、ロシア人民主義に導かれた voluntarism がマルクスの決定論的公式と混合されたものである。李大釗の人民主義は、マルクス主義者になる前の、「不自然な力によって抑壓されている、人民の一般意志 common will of the people」があるという信念」にもとづくものであり、この信念はマルクス主義者になつて後も強化され、政治組織としての民主主義が、人民の精神と意志の自由な表現を抑壓することに對する反感すらも示されている

〔平民主義與工人政治〕一九二二、〔平民主義〕一九二三。

第十章。都市労働者の組織化に専念していた李が、民族ブルジョワ革命を目指す國共合作を、なぜ支持したのか、この章の主題である。一九二三年八月、杭州で開かれた中共中央委員會で、マリーンが國共合作の提案を行ない、翌年六月の三全大會で、これが正式に承認された。著者は、この時李大釗は、マリーン提案の支持者だつたと推定し、その理由として、一九二二年末、北京の黨には漸進派と急進派の對立が生じ、前者は、李とコミンテルンの支持の下に中國の條件はプロレタリア的階級闘争には不適當で、先ず「國民革命」が必要であり、そのために共產黨が國民黨内部で活動するのが最善だと主張していたこと（坊魯「清算陳獨秀」一九三三）、更に李自身のイデオロギー傾向として、①中國の都市プロレタリアの革命能力に餘り期待していなかつたこと（馬克思的經濟學說「一九二二」）、②帝國主義が主要な敵であるから、革命闘争にはプロレ

タリアだけでなく、帝國主義の被害者である全階級を含むべきだといふ民族主義的主張（「十月革命與中國人民」一九二三）を擧げている。そして李は、國共合作の期間中、孫文の「國民革命」に對して、①それは階級性をもつた太平天國民族革命の傳統を受けついで（「中山主義的國民革命與世界革命」）孫中山先生在中國民族革命史上之位置」ともに一九二六）。②國民革命は世界革命の一部であるだけでなく、その反帝國主義運動は、全世界の革命的闘争の動向をきめる決定的な力である。③國民革命は、性格としてはプロレタリア的であり、願望としては社會主義的である、という評價を与えていたことが指摘される。

第十一章。李の農民革命論については、森正夫「國民革命期における李大釗の農民問題論」（『新しい歴史學のために』No. 98）というすぐれた論文がある。しかし、森とこの著者との間には、評價の上でのみならず、史料の扱い方の點でも著しい相違があるので、この章はやや詳しく紹介する。

著者はまず、「土地與農民」（一九二五）は、一九二五年末頃の北方における黨活動の苦境からうまれた產物とみなす。孤立化しつつある知識人と人民との間のギャップに橋渡しをするために、農民の反抗的力量に注目したのである。この論文の歴史的制約は、「國民政府の強化、國民革命の完成という中での農民革命の役割という限界内で考えていた」とされる。けれどもこの論文は、①國民黨との合作によって課せられた限界から離れつつあること、②農民の革命能力についての正統的共產主義者の評價から離れつつあることを示唆している。具體的には、農村における階級闘争の必要性、農民自身の農民協會の組織、農民自衛軍の必要性などを説いたことを指

す。

一九二五年から二六年の間の、農民運動の高潮に際して、一九二六年七月、上海で開かれた共産黨中央委員會第二回擴大ブレンラムは、これに對して抑制的な見解を發した（「中央委員會政治報告」「農民運動に關する決議」。中央委員會は、農民運動が左翼的逸脱の缺陷を發展させ、そのスローガンが極端であるか、行動が極左的であるかのどちらかだとのべて、その革命的自主的の性格を抑へはじめた。紅槍會に對しては、國民革命における重要な反軍閥的勢力であることは認めたが、その傳統的軍事的秘密結社の活動には不信を抱き、その基本的に反動的な性格について警告し、更に軍事力による地方的權力の奪取は認めないと警告した。李はこの時、中央委員ではあったが、このブレンラムには缺席していた。當時は三・一八大虐殺の後だったから、北京のソ連大使館に難を避けていた。

「魯豫陝等省的紅槍會」（一九二六）は、三・一八以後、その年の夏の終りまで（『政治生活』はその頃に發行を停止）に執筆された。

この論文は、①農民運動は都市プロレタリアの革命運動に從屬するという見解（レーニン）をとらず、農民運動を獨立した勢力だともみなした、換言すればプロレタリアの代表としての共産黨の役割を無視した。②農民革命について、レーニンの前提からも、コミンテルンや中共中央委員會の政策からも離れていた。③中國はプロレタリア民族という立場から、中國民族の大多數を占める壓迫された農民の中に、革命の潜在的な力量を、プロレタリアートの意識の潜在を見出した、という點に特色があると著者は説く。

結語。李が逮捕され（一九二七年四月六日）死刑に處せられる（同年四月二十八日）間の狀況と後日談を叙述した後、李のマルク

ス主義解釋にみられた諸特徴がすべて、毛澤東によつて繼承され發展させられたことが、シュラムの研究に従いながら説明される。最後に著者は、李大釗は中國共産主義運動を勝利に導いた後繼者を案内したイデオロギー的方向をつくりあげ、後に毛澤東に受け繼がれた非正統的政策の一般的アウトラインを推進するための案内者であった、として稱讃している。

以上で、この著者の論點はほぼ要約したが、ここで筆者の腦裏には、著者に對する共感・反撥・疑問が去來する。著者の精密で鋭い切迫には感嘆したが、その曲折して長く續く表現には、いささか閉口した。著者が意外に、アメリカ人に通有の反共的感情を抑制して、實證的態度を貫いていた點も、少々感心した。もちろん大小様々の疑問や不満も生ずる。小からいえば、「儒教的傳統的」という概念の曖昧さは氣になるし、ルソー主義が李に強い影響を與えたことを説きながら、それと「儒教的傳統的」な觀念との關連は分析されていない。相互扶助論と階級闘争論との關連についても、その調和論的弱點は指摘されたが、積極的側面もあるのではないかと思われる。そのほかにもまだあるが、今は省略し、最も氣がかりな點について觸れておきたい。それは、この著者だけの傾向ではなくて、Schwarz にも Schran にも共通していることだが、民族主義者としての側面、或は voluntarist としての側面を、執念深い位に追求しようとしていることだ。これは換言すれば、李がいかに正統的マルクス主義から逸脱していたかの追求にはかならず。この點に、この書物の特色はあるのだが、同時に筆者の不満も、實はその點から發している。もはや豫定の枚紙を超過しているので、民族主義の問題についてだけ、ごく簡単に論評しておこう。李大釗の思想に民族

主義的性格が濃いということは、確かに言えるだろう。しかし一歩退いて考えるなら、李にとつてのみならず、近代中國の人民にとつて、民族主義とは一體何であらうか。民族主義が、その高まりに強弱の差はあれ、近代中國の歴史を、そして李大釗の生涯を色どつていたとすれば、それは一貫して、外國帝國主義の侵略に對する中國人民の抵抗の表現にはかならない。近代中國の歴史においては、帝國主義と中國民族との矛盾が、多くの矛盾のうちで主要なものだとは、毛澤東がしばしば強調したことだが、このような状況の中において、中國人民の（そして李大釗の）抵抗の論理は、必然的に民族主義的になるであらうし、その抵抗の論理の中の最も確實なものを模索した認識の過程の一段階として、反袁鬭争、人民の一般意志、新アジア主義、國共合作の支持、等々は位置づけられるべきであるし、ルソー主義、マルクス主義、相互扶助論、voluntarismなどは、そうした眞の認識にたどりつくための手段にかならない。毛澤東は「愛國主義の具體的内容はそれがどのような歴史的條件のものであるかによつてきまる」（「民族戦争における中國共產黨の地位」）というが、李の民族主義は、帝國主義侵略の最も深刻な時期であつたが故に國際主義的でもありえたのであり、著者のように、國際主義と對比すべきものではないし、また、マルクス主義者が民

族主義者でありえたのも、決して、「中國知識人に特有のパラドックス」ではない。民族主義に對比すべきものは、正に帝國主義である。この著者には、そして一般にアメリカの現代中國研究者には、以上のような觀點が全く缺けていることを指摘しておきたい。

① 里井彦七郎「李大釗の出發」（『史林』第四十卷三號）丸山松幸「李大長の思想とその背景」（『歴史評論』八七號）。その後の研究論文には、丸山のほか、西順藏、野村浩一、近藤邦康などのものがある。

② この英語で書かれた自傳は、一九一四年、李が早大にいた時、YMCAのワーカー Arthur Robinson が英語教室で書かせた作文だといふ。

③ 一つだけ興味をひく資料が示されている。

A. A. Muller「革命の焰の中で、一九一七—一九二〇、赤衛軍國際派遣隊隊長の回顧」（イルクーツク、一九五七）をツ連の研究論文から再引用して、Volinsky に先立つて中國に來た二人のロシア共產黨員のことなどの記述がある。

④ 著者はこの見解を李大釗獨自のものとなしなしているようだが、陳獨秀も「社會主義批評」（『新青年』九卷三號、一九二一）で、同じ見解をのべている。（坂出祥仲）